

「詩」とは何か、どう手渡すか —日本の子どもの文学における「詩的なもの」についても—

宮川 健郎

【講義概要】

幼い子どものなかには、「詩」があるのではないのでしょうか。

その子どもたちといっしょに、どんなふうにして詩を楽しむか、具体的にご提案したいと思います。そのなかで、「詩」とは何かということも、わかってくるはずです。

また、日本の子どもの文学は、詩的で象徴的な「童話」から、もっと散文的な「現代児童文学」へと転換したと考えられます。この文学史を確認しながら、童話という「詩的なもの」のもつ可能性についても考えます。小川未明、浜田廣介、あまんきみこなどの作品にふれていきます。

【講義の構成】

1 幼い子どものなかには「詩」があるのではないか

ここでいう「詩」とは、幼い子どもに固有の世界の見方のことです。それが、私たち大人の世界のとらえ方の変更をうながします。(文学理論でいう「異化」につながります。)

子どもたちは、ことばから聞こえてくる「声」を体いっぱい受け止めて楽しめます。そこにも、「詩」があります。

わが家の子どもたちがまだ小さくて、子育ての真っ最中だったころ、子どもたちのことをエッセイなどの文章にしばしば書いていました。そうした文章のいくつかを久しぶりに引っ張り出して、考えるヒントにしたいと思います。

2 子どもたちといっしょに、どんなふうにして詩を楽しむか。そして、「詩」とは何か。

○ 詩を 10 分で暗誦する方法

以前、埼玉県朝霞市の小学校で霜村三二先生がなさった、まど・みちおの詩「うめぼしちゃん」の暗誦の授業を参観したことがあります。1 年生の 3 学期の国語です。対面の講座なら、みんなで実際にやってみるのですが、オンラインですとむずかしいので、どんな授業だったのかお話しします。暗誦の授業のなかで、詩の読者だった子どもたちの想像力は、詩の作者のほうへ回り込み、詩がどのような意識によって構成されているか自然にわかっていったのです。

○ 詩が行をかえながら書かれていくのはどうしてか

谷川俊太郎「みみをすます」(『みみをすます』福音館書店 1982 年所収)を読む

「これらの、一行一行のことばに出会う時に、目覚めてくる驚きが、詩をよむ、ということ

のすべてではあるまいか。」(竹内敏晴「こえによって「よむ」ということ(一)——「みみ」を「すます」」(『時満ちくれば』筑摩書房 1988 年所収／『ことばとからだの戦後史』ちくま学芸文庫 1997 年所収)

(参考) 宮川健郎『物語もっと深読み教室』(岩波ジュニア新書 2013 年)

○ 「詩の絵本」の試み

『詩の絵本 教科書にでてくる詩人たち』全 5 巻(宮川健郎監修、岩崎書店 2017 年)を読む

3 日本の子どもの文学における「詩的なもの」の可能性

○ 1950 年代の「童話伝統批判」と 1959 年の「現代児童文学」の成立

詩的で象徴的な「童話」から、もっと散文的な「現代児童文学」へ。

1959 年 佐藤さとる『だれも知らない小さな国』(講談社)、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』(中央公論社)

(参考) 宮川健郎『現代児童文学の語るもの』(NHK ブックス 1996 年)

○ 「童話伝統批判」の言説を読み直す

・古田足日「さよなら未明—日本近代童話の本質—」(『現代児童文学論』くろしお出版 1959 年所収) 「散文性」の獲得

・石井桃子ほか『子どもと文学』(中央公論社 1960 年)

「世界的な児童文学の規準——子どもの文学はおもしろく、はっきりわかりやすく」(「はじめに」)

「小川未明」(いぬいとみこ執筆) 「ナンデモ ハイリマス」への批判 「主人公の子どもが、ポケットには何でも入ります、という「発見」をしたところから、何か事件がはじまるべきなのです。」

その対極にあるものとしての、いぬい『ながいながいペンギンの話』(宝文館 1957 年)

「浜田広介」(松居直執筆) 「泣いた赤おに」の書き出し、「コブタノ トコトコ」の締めくくりへの批判 「口誦性」の抑圧 「声」のわかれ

・古田足日「現代のファンタジイを(1)」(『学校図書館』1968 年 7 月、『児童文学の旗』理論社 1970 年所収) あまんきみこ『車のいろは空のいろ』(ポプラ社 1968 年)への批判

「あの本の作品はすべて長編の出だしだと思った」 物語を直線的な時間のなかで発展させようとする。

その対極にあるものとしての古田・田畑精一『おいしいのぼうけん』(童心社 1974 年)の長いテキスト

(参考) あまんきみこ研究会編著『あまんきみこハンドブック』(三省堂 2019 年)